

所外3

アカゲザルの居住環境変化にともなうストレス潰瘍による死亡例

松林公蔵、奥宮清人、和田知子、藤沢道子、
藤井智代子、（高知医大・老年病科）、松林清明
（京大霊長研）

今回京大霊長研よりアカゲザル一頭の所外供給を受けたが、当施設移送後、徐々に食欲が低下し、保温と経静脈的輸液を実施したが、供給後10日目に死亡した。臨床経過と剖検結果を報告する。

【臨床経過】京大霊長研からの移送に際しては、研究対応者である松林獣医師が高知まで随行し、食餌、水分供給と移送時の経過観察に遺漏はなかった。当施設では、霊長研における居住環境と可能な限り同一とすべく、同等の大きさのケージを用意し、自動給水とした。食餌はサル用固形飼料とリング、さつまいもであった。当施設収容後、7日目頃から残餌がめだつようになり全体的な動きも鈍くなってきた。ぶどう糖液の点滴と保温を開始したが10日目に死亡した。

【剖検結果】体重2600g、側頭部に中程度の脱毛と右口腔より少量の出血を認めたが、明らかな外傷はない。皮下組織、腸間膜の脂肪織の発育は不良。心、肺、肝、腎等の実質組織に異常なく、脳にも異常所見を認めなかった。胃大弯側に小出血斑をとまなうびらんを認めた。小腸、大腸に癒着を認めないが、回盲部に小出血斑を認めた。

【考察・結論】死因は、環境変化不適応によるストレス性急性胃びらんとそれに伴う栄養不全死が推定された。当サル飼育施設では、可能な限りの適応環境づくりに努力したが、所外供給に際してはさらに検討を要すると考えられた。なお、臓器は固定保存し、今後老ザルとの比較検討を行う。